

12月25日礼拝説教(隅野徹牧師)短縮版

「クリスマス～神のことばの到来」(ヨハネ1:1～14)

今回は14節を中心として語ります。「神の愛の御意思の表れ」として「暗闇のような罪に溢れたこの世に来てくださった」キリストのことが13節までで語られてきましたが、それが実際「どのようになされたのか」が14節教えられます。

「ことばが肉となった」とは「神が、人間にその思いを伝えるために遣わした言葉」が「人間の姿となった」ということです。つまり「神の独り子がイエス・キリストとして、この世に生まれてくださった、身を置いてくださった」ということです。そのことによって、私達人間は「天におられるイエス・キリストの父なる神」の真理、つまり「正しさ」と、愛に溢れたその恵みを知ることができた、ということが教えられるのです。

ヨハネによる福音書は、このようにして「クリスマスの出来事」を、「キリストがどこどこで、誰から、どのような状況でお生まれになった」という角度から語るのではなくて、「全知全能の創造主である神が、罪深い人間をそれでも愛しておられることを伝えようとした、その出来事がクリスマスだ」と語っているのです。その「神の愛のことば」が「私達と同じ人間となって」「私達と共に生きて下さった」そのことで、私たちは大切な真理を知ることができるのです。

暗闇といえるこの世でも、「神が私達を愛し抜いてくださっている」そのメッセージを、このクリスマスに受け取りましょう。(終)